
天使大学

小論文試験対策講座資料

<2019 年度第 3 回オープンキャンパス資料>

駿台予備学校

本資料の利用について

本資料および別紙資料「天使大学 小論文対策」は、駿台予備学校が執筆・編集し、天使大学入学試験問題に関する分析と入学試験対策について記載したものです。これは、あくまでも過去問題についての分析で、この内容が 2020 年度以降の天使大学入学試験において、そのまま当てはまるとは限りません。この点をご留意のうえご活用ください。

天使大学では、この掲載内容に関する一切の責任は負いかねます。あらかじめご了承ください。

天使大学 小論文対策

〈はじめに〉

小論文では、「問われていることについての、**読解力・分析力・問題解決能力**、およびそれらを基礎にして、書くことによって自分の考えを伝達することができるかどうか（**伝達表現能力**）」がはかれます。天使大学のアドミッションポリシーに「入学後の学修に必要な基礎学力としての知識や技能、思考力、判断力、表現力をもっている人」とあることから小論文が課せられている理由が理解できるでしょう。

したがって小論文対策として、文章を書く練習だけではなく、**読解力**（課題文から筆者の主張を読み取る）・**分析力**（問われていることは何か、何を論じなければならないのかを的確に判断する）・**問題解決能力**（問われていることに対して自分であればどうするのか、考える）を養うべく過去問等を使い練習する必要があります。また、ジャンルにこだわらず様々なことに興味を持ち、「自分ならこう考える」というように「考える」習慣をつけることも大切です。「誰かが言っていたこと」ではない「自分の考え」は、日頃考えることをしていなければ持つことができません。

〈問題形式〉

公募制推薦入学試験・社会人入学試験ともに、過去の「小論文試験」の形式は以下の通りです。

- ① 課題文を読み、250～300字以内で要約をする。
 - ② 筆者の論述をふまえた上で、課題文中の傍線部について自分の考えを900～950字以内で述べる。
- ①②あわせた字数は1200字。課題文のテーマは様々です。（試験時間は75分）

〈対策〉

① 要約

教科書・問題集の評論文で練習をしましょう。そのとき、**〈対比×具体例×問題提起されている部分〉**に注目をして読むことを心掛けて下さい。これらによって読み取ったことを、読み取った順番にまとめたものが要約です。また、何について述べられている文章なのか「**主語**」を示すことが大切です。

★2019年度公募制推薦試験の課題文に、問題提起をしている部分があります。確認してみましょう。

② 自分の考えを書く

小論文は作文とは違います。ただ自分の考えを述べるだけではなく、なぜそのように考えるのかという「理由」を客観的な視点で述べなければなりません。また、**課題文の筆者の考えを抜き書きして、批判したりいかによいかを説明したりするのみでは、「自分の考え」を述べたことにはならない（筆者の考えについての批評になってしまう）、と理解をしておきましょう。**

〈特に対策すべき事項〉

★線を引かれている部分を見て、何について述べるべきかを把握する（テーマの見極め）

《過去の問題で、テーマを見極められるか確認してみましょう》

- ・「ひとはどんなに親しくなっても他者なんだということを意識した上での信頼感」
- ・「超一流になるレベルの熟達」
- ・「意識化された問題が自分自身のなかにあることが学ぶことの動機になる」
- ・「私どもの持っている既成の概念や知識と相容れないようなものを受け入れる気持を、私どもが持っていなければ、自分の心の中で、あるいは他の人の心の中で成長すべき新しい大切なものが萎んでしまう」

★ テーマに関して、自分の考えが**すぐに**思いつくようにする

- ・高校生活とはどのようなものか、について書いてみましょう
「高校生活とは

- ・何についてでもよいので、**毎日** 3～5 個テーマを決めて理由とともに考えを書き留めてみる
とよいかもしれません。」

★ 自分の考えが伝わりやすい書き方を身につける

結論(自分の考え) → 理由(必要に応じて例・対比を使う) → 結論・展望

という形式で練習をしてみるとよいでしょう。

★ **大きくはっきり濃い**「読みやすい字」で書く

自分のスタイルを決めて練習を重ねることは、試験当日スムーズに論文を書くことにつながります。〈資料〉を参考にしながら練習をしましょう。そのときに、自分の文章が人に伝わるものであるかどうかを確認するために、信頼できる人に添削をしてもらおうとよいでしょう。

小論文作成にあたって

小論文作成問題は大きく分けて「与えられた文章を読み、その内容について論じる」場合と、「与えられたテーマについて論じる」場合の2種類があります。いきなり小論文を“書こう”と思っても何から手をつけてよいのか分からないでしょう。以下その基本的な留意点について解説します。

《課題文を読んでその内容について論じる》

●課題文の読解が大前提

課題文が与えられて、それについての意見を述べることが求められているのだから、まずなにより課題文の適切な読解が前提になります。

では正しく読解するためにはどのようなことに留意すべきでしょうか？基本的なことを確認しておきましょう。

1 〈例〉と〈論〉の区別を意識して、論の展開を追う。

文章は大まかに次の二種類に分けることができる。

①筆者の主張や結論に直結していく話の本筋部分（これを〈論〉という）

②比喻や具体例を述べて話をわかりやすくするための補足部分（これを〈例〉という）である。

〈論〉が話の本筋であるのに対して、〈例〉はいわば遊びの部分である。〈例〉があるからこそ読む方も具体的なイメージをとまなげてよく理解することができるわけだが、より重要なのは〈論〉である。文章の読解は〈例〉を助けとしながら、あくまで〈論〉の展開を追うことである。読む時に〈例〉と〈論〉の違いを意識して、〈例〉を省いて〈論〉を残していくような意識で読むことが大切である。読みつつ傍線などを引くのは〈論〉の部分ということになる。

2 文章の〈対比〉・〈同類〉・〈因果〉をふまえて話の本筋、展開を追う。

文章の書き手は、自分の主張をわかりやすく、かつ効果的に伝えるためにさまざまな工夫をする。その基本は〈対比〉・〈同類〉・〈因果〉である。たとえば日本のことを述べるために中国やアメリカと〈対比〉して違いを指摘したり、逆に同様な点を取り挙げて説明すれば話が分かりやすい。また重要なことは表現を変えて繰り返すことによって強調する。読む方はそうした〈同類〉の内容を意識して読み取っていけば自ずと筆者が強調する論点を見いだせる。さらに、論理は〈因果〉関係によって展開し、進んでいく。先に述べたことを前提にすれば、次にこういうことが言える、といった展開の仕方である。

このように読解の基本は文章の〈対比〉・〈同類〉・〈因果〉をふまえつつ、話の本筋を誤りなくとらえて読み進めていくことである。

●部分的な内容ではなく、課題文の主旨、筆者の主張に対して意見を述べる

課題文について的小論文で最も注意しなければならないことは、筆者の主張に対して意見を述べる、ということである。だからこそ先に指摘したとおり適切な読解が最優先なのだが、筆者の主張を正しくとら

えても、それについての自分の考えを論述しなければ意味がない、ということである。当たり前のことを言っているようだが、課題文についての小論文でしばしばある誤りは、課題文中の部分的なことを取り挙げて論じているケースである。極端な場合は課題文で〈例〉として取り挙げられていることについて延々と論述し、それについて自分の意見を述べているような小論文がある、ということだ。これでは課題文に対して論じたことにならない。課題文が提供されているということは、課題文が結論として主張していること（主旨）について自分の意見を述べよ、ということである。この点をしっかりと意識しておかなければならない。

《与えられた課題について論じる》

課題だけが与えられて、それについて論じるというのは、自由度があって易いようですが、なかなか難しいものです。

●課題と自分の接点を見いだす

課題によってはこれまで自分が考えたこともないようなことがらや、未知の分野から出題されていることもしばしばである。しかし課題として提示された以上それについて書かなければならないのだから、なんとかして論じる糸口を見つける必要がある。そのために自分と課題との接点を探してみよう。課題と直接つながらなくても、関連づけられる経験や見聞はなかったかチェックしよう。社会的な問題であっても人間生活の現実から遊離してはあり得ないのだから、自分の日常生活、周囲を見回して課題を自分の身近な問題として受け止めて論じられるような接点を見つけよう。

●自分のこれまでの経験や知識を総動員して話の材料を見つける

上記の項目と関連するが、小論文で述べる材料は必ずしも自分自身の体験である必要はない。人から聞いた話、本や新聞で読んだこと、テレビやラジオ、ネット等で見聞きしたことなど、すべて広い意味で自分の経験であり、見聞である。それらをすべて自分の頭の引き出しにあるものとしてとらえ、課題に対応する記述の材料として使っていこう。

小論文を書いてみよう

《基本的な心構え》

・〈根拠〉を示そう

「感じたこと」と「考えたこと」とはもちろん別のことである。では、どこが違うのか。それは〈根拠〉が示されているかいないかである。たとえば何かを読んで「おもしろかった」と言えばそれは「感じたこと」でしかないが、なぜおもしろかったのかと理由を考え、他人にわかるように説明できれば、それは「考えたこと」になる。〈感想〉は個人的なものにとどまるが、第三者にも納得できる根拠が示されれば、より多くの人が共有できる〈考え〉になる。したがって論述する際に、「感じたこと」で終わってしまわないように注意すること、〈根拠〉を示して「考えたこと」にまで内容を深めていくことが大切である。これは言い方を変えれば、感じたことをきっかけにして思考を発展させていくということでもある。誰でも感じることはできる。どんなことに対してもごく簡単な感想を持つだろう。それは思考のきっかけであり、出発点なのである。大切なことは感想を感想で終わらせないことである。どういうかたちであれ課題を与えられたら、自分が課題に対して何を感じ取ったのかを、まずしっかりとらえるようにしよう。

・「感想」から「考察」へ⇒「なぜ」と問うこと

感想は思考の出発点だと述べたが、ではどのようにして思考へとつなげていくのか。何か新しいものに接した時に（小論文の課題や提示された課題文など）、まず自分の中に生じるのは「感想」である。「おもしろい」とか「つまらない」とか、それは言わば反応に近いものだ。ただそこで終わってしまえば何も生まれない。そこから、なぜおもしろいと感じたのか、なぜつまらないと言えるのかと問うこと、つまり「考察」していくことが大切である。「なぜ」と問うて、一つ答えらしきものを見いだしたとしても、その答えらしきものについて再び、なぜそれが答えとなりうるのか、と問うのである。文章を書いているのは自分ひとりだから、なぜと問うのも、それに答えるのも自分だけである。自分で問いを設定し、自分で答えを想定する。そういう〈自問自答〉を繰り返していくことがすなわち「考える」ことであり、「考察」するということである。「考察」は時に自己分析になったり、時に社会的な背景を考えたりとさまざまな広がりをもって展開されていくだろうが、その「考察」の過程自体がすなわち小論文の内容そのものなのである。

《具体的な作業》

・結論を決めて書く

前項で考察のプロセス自体が小論文の内容だと述べたが、実は小論文の場合、やや特殊な面がある。それは結論の方向性をあらかじめ想定しておく、ということだ。文章を書くということは考えることである。話の流れ、論理のつながり、表現の工夫等ばかりでなく、何より書こうとする内容についてあれこれ考えなければ書き進められないはずである。そして書くことによって新たな考えが生まれたり、予想もしなかった展開になったりすることもある。しかし、だからといって何の準備もないまま書き始めることはできない。特に小論文の場合は、まずある程度の結論をあらかじめ想定しておき、その結論に向かって書き進

めていく、というかたちを取るのがよい。書くことによって新たな発想が生まれることはあるにせよ、まず、〈こういうことを言おう〉と結論（着地点）を決めておくことが大切である。そのために課題や課題文を与えられたら、まずそれについてじっくり考えてみて、結論の方向性を探ることが最初の作業である。

・身近なこと、知っていることと関連づける

結論の方向性を決めると言っても、課題によっては自分にまったく関心のないことであったり、抽象的で難しい内容だったりする。むしろそういうことの方が多いかも知れない。そうした場合難しくて関心のもてない課題と無理に付き合うのではなく、自分が知っていることや自分の身近なことと関連づけてみよう。課題と自分の接点を見つけるのである。課題を見直し、とらえなおしてみよう。与えられた課題の内容と自分の接点を、いささかでも見つけられれば、それが結論を設定する大きなきっかけにもなるし、論述を書き進めていく強力な動機づけとなる。

・「たしかに……しかし」という発想

結論の方向性を探るということについても一つ有効な方法がある。「たしかに……しかし」という発想法だ。「たしかに……しかし」は一般に譲歩の表現といわれるものである。「たしかに」で自分と違う立場の意見や反論などをいったん受けとめる。次に「しかし」と逆接して、受けとめた反論を否定して自分の意見をあらためて主張する。反論や違う意見があることはじゅうぶん承知しているというアピールであり、あらためて自分の主張を繰り返す強調表現でもある。これはしかし、論文を書く際の発想法としても有効である。提示されたものをいったん確認する。がそのうえで、果たしてそうか、と立ち止まってみるのである。見たもの、聞いたこと、読んだ内容をそのまま鵜呑みにしない、あるいは安易にわかった気にならない、ということは大事なことだ。理解することと賛同することは別のことである。正確に理解したうえで、果たしてそうかと自分の頭とことばで考えて、確認してみることが必要である。そして別の見方や考え方の可能性をさぐってみる。手っ取り早く逆を考えてみてもよい。それは先に述べた「考察する」ということでもある。ニュース報道でも、専門家の意見でも公共空間に流れている言説はそれぞれにみな説得力があろうが安易にわかった気にならない。なんにでもともかく反論してみよなどと言っているのではない。自分の頭とことばで確かめるという姿勢をもつようにしようということである。

・適切な具体例を書く

結論が決まったら、それを述べるための話の材料と話の順序を決める。つまり具体例と構成である。抽象的な議論ばかりを書き並べるより、結論をうまく説明するための、あるいは結論と関連する具体例がほしい。具体例は必ずしも自分の経験である必要はない。自分がこれまで見たり聞いたり、読んだりして知っている具体的なことがらであれば何でもよい。結論すなわち自分の主張を効果的に説明し伝えるための具体例である。結論とうまくマッチした効果的な具体例が提示できれば、それだけで説得力のある論文の強力な条件を一つ備えたことになる。逆にミスマッチの具体例では結論の善し悪し以前に、大きく説得力を削ぐことになる。具体例の選択はたいへん重要である。

・構成（話の順序）を考える

結論と話の材料（具体例）が決まったら、次はそれを並べる順序（構成）である。たとえば、結論をはじめに提示するのかどうか、具体例が複数あるならどれを先にするか、などといったことである。つまりはどのような話の流れにしたら自分の主張がよりよく相手（論文の読み手）に伝わるかを考えるということだ。その際、それぞれの量的配分もあわせて考えるようにしよう。小論文やレポートに限らないが、一般にははじめに結論を述べた方が読む方が安心して読めるという意味で、わかりやすい論文になる。

・簡単にメモ書きをする

結論の方向性から具体例や構成など、簡単なメモ書きをしてみる。あくまでラフに書いてみる。つい長々と書いてしまうようなら、箇条書きのように書くのもよい。本格的に書き始める前に、建築図面や計画書のようなものとしてメモ書きをして、構想全体に矛盾はないか、論理的整合性をチェックするのである。

■補足

・自分の引き出しを増やす

最後にやはり、小論文を書くために自分の頭の中の引き出しを増やすということの大切さを強調しておこう。多くのことばに接すること、つまり活字に接する機会や時間を多く持つ必要があるということである。読書は話題や知識が豊富になるというだけでなく、自分の語彙も増え表現力もつく、さまざまな考えや考え方があることも知ることができる、自分の無知を理解し貧弱な思考にしがみつ়く愚を避けることもできる、などなどその恩恵ははかり知れない。ただ、量をこなすだけでなく多く読み多く考えることが大切である。

「小論文を書く」ということが少しは理解できましたか？具体的な作業をもとに実際に書いてみるのが大切です。出来上がった小論文は可能であれば添削してもらい、客観的な評価を受け止めさらなる上達を目指していきましょう。